Ⅵ. 資料２：研究会記録

・７月８日の第１回から３月８日の第９回まで、９ヶ月全９回にわたる研究会の議事録と一部の途中成果物を掲載します。

記録内容

回	日　時	場　所	記録内容
1	7月　8日(火) 18:30～20:30	なごやボランティア ・ＮＰＯセンター	・第１回研究会議事録
2	7月２７日(日) 13:00～17:00	ＪＩＣＡ中部	・第２回研究会議事録 ・別紙１：課題カード
3	8月２８日(木) 18:30～20:30	ＮＩＥＤ・国際理解 教育センター	・第３回研究会議事録 ・別紙１：個別カードのまとめ
4	9月１８日(木) 18:45～21:00	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第４回研究会議事録 ・別紙１：個別カード優先順位
5	１０月２１日(火) 18:45～22:00	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第５回研究会議事録
6	1月　9日(金) 18:00～21:30	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第６回研究会議事録 ・別紙１：結果から読み取ったこと
7	1月３０日(金) 18:00～22:00	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第７回研究会議事録
8	2月１１日(祝) 13:00～21:00	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第８回研究会議事録 ・別紙１：提言座長案
9	3月　8日(月) 18:00～20:30	ＮＩＥＤ・ 国際理解教育センター	・第９回研究会議事録

■ 第１回　愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会　議事録

◆日時：平成１５年６月８日（火）午後６時３０分～８時３０分

◆場所：なごやボランティア・ＮＰＯセンター小集会室

◆参加者：（委員）今津、荻原、久世、栗木、里村、瀬尾、田中、野田、山中　（欠席者：濱田）＜敬称略＞
（事務局）礒貝、藤原、川合

◆配布資料：

(0)レジュメ（議事次第）

(1)愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究の趣旨

(2)研究会委員名簿

(3)研究会のスケジュール（案）

(4)開発教育と国際理解教育に関するレジュメ（開発教育指導者研修資料のコピー）

(5)平成１５年度ＪＩＣＡ中部の開発教育メニュー

◆議事の経過と結果の概要

１．主催者あいさつ

◇礒貝から配布資料を確認する。

・資料の訂正。資料(0)の中で、第２回研究会の場所は「ＮＩＥＤ・国際理解教育センター（本山駅）」ではなく、「ＪＩＣＡ中部国際センター（一社駅）」と訂正。

・委員会の進め方は、参加型で進めたい旨、説明・確認した。

◇ＪＩＣＡ中部国際センター荻原所長から主催者を代表してあいさつ。以下は要旨。

・みなさんご活躍の方ばかりなので、開発教育の歴史や現状は省く。

・なぜニーズ調査なのかについてお話してあいさつに変えたい。

・開発教育に関連する活動はＪＩＣＡでいろいろやってきた。

・今の時代は総合学習が高校まで始まり時代の節目だと思う。

・過去にもアンケート調査がなされたと思うが、総合学習が始まってからは実施していないと思う。

・グローバル化の時代にあっても地域のことを考える必要がある。

・愛知県というエリアに限って、きちんと見ることに価値があると考える。

・小・中・高等学校に絞って総合学習実施のビフォー・アフターの状況を知りたいというのが単純なねらい。

・ＪＩＣＡは開発教育支援などこれまでのサービスの強化をしようとしているが、究極には人材強化が必要。

・わかりやすく言うと第２の第３の山中令子氏を作らなければだめだと思う。

・人材を育成しても、お客さんが何を求めているのか、そこをつながないといい人材育成もできない。

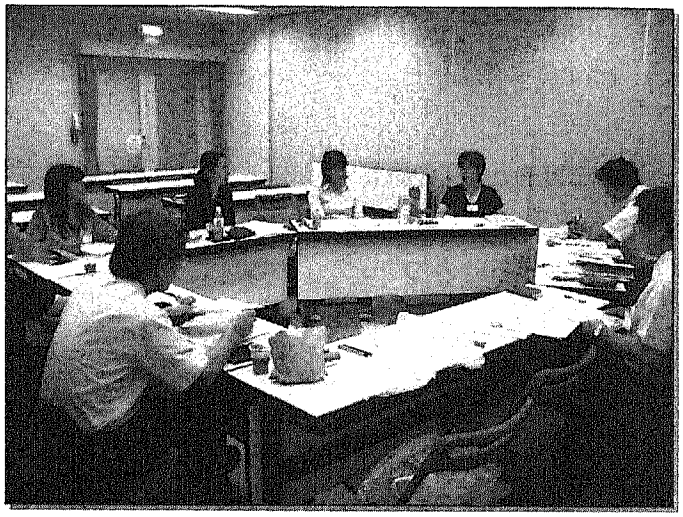
・その人たちが現場のニーズがどうなっているのか、どう変わっているのか、進んでいる現場と旧態依然の現場、現実の教育の現場を正確に把握して、現実として伝えていきたい。

・ニーズ調査の成果を、ＪＩＣＡのためでなく、地域のために、現在こちらで活躍している名大、ＮＩＣ等をつないで、共通の現場認識につながればよいと考える。

・総合学習が高校で始まった。一番難しいのが高校かなと思う。

・従来のメニューで本当によいのか、内容を進化させるような検討会が必要ならば、次のステップの手を打っていかなければいかない。
・問題点が明らかになってくれば対策を打つことができる。
・こうした４～５のねらいを持ってこの研究会を進めたいと思う。
・日本で最初の総合学習実施後のニーズ調査だと自負している。
・地域にあった地域の役に立つ調査になればよいと思う。

◇議員氏から研究会など本業務の実施主体について説明。
・研究会の事務局はＪＩＣＡが行う。
・アンケート調査はＮＩＥＤ・国際理解教育センターに委託をしている。



▲ 第１回研究会の様子

２．調査研究の趣旨、スケジュールについて

◇座長から、趣旨について、資料(1)を読み上げる形で、背景、目的、内容の説明。
◇質疑応答（☆：質問、◎意見、→：質問に対する回答・意見）
☆アンケートの対象者は？学校ごとか個々の教員か？
→今のところ学校ごとと考えている。国際理解教育担当者様なのか？実際やっている人を見つけて出すのかは今後考えねばと思う。
→学校で一体となって取り組むことはめずらしい。アンケート対象は知恵を出すところと思う。
☆これまで学校で調査したことはあるか？
→ない。学校というのは想像以上に大変。アンケートがどういう方法で可能かを考える必要がある。
→国際協は基本的に協力してくれる。先日総会があったので、考えをプレゼンして協力をお願いしてきた。きちんとした段取りを踏む必要があるし、教育委員会の協力が必要。
→教育委員会、校長会、教員組合から了承を得ることが重要である。
→総合学習をテーマに聞いた方が受け入れやすい。
→教育委員会には協力してもらうように頼んではいる。
→アンケートがうまいことみんなにわたるような戦略を考える必要がある。

☆調査手法はアンケートだけか？聞き取りは？また、アンケートは全校か？
→聞き取りを入れることなどは、みなさんと考えていきたい。
→知っている先生にこれを書いて下さいと頼むのが一番。直接聞いた方が効果的。
→アンケートは全校である。
◎愛知県における小・中・高等としているが、高校の現場で教えているものとして、先生だけでなく、生徒や保護者における認知度、ニーズがあるのか？を知りたい。やらない側の理屈はよくわかる。受験教育やってほしいという意見が多いけど、本当はどうか？を知りたい。
◎ニーズを３つに分けて考え、こうしたニーズをどのようにアンケート調査をするかがポイントである。
１つ目は、生徒、教師、保護者　知りたい、やりたいという自覚するニーズ。２つ目は、言葉にならない無意識なニーズ、もやもやしている人。そうした人へはアンケートの聞き方も大切。芽生え始めているが形になっていないニーズ。３つ目は、アンケートをやることによってニーズを開発していく。何も考えていなかったがこれを機会にキャンペーンすることによって出てくるニーズ。
◎国際理解教育・開発教育の定義を確認しておきたい。（資料(4)のｐ６５の９行目から）

◇座長から、資料(4)でスケジュールの確認を行う。

３．研究会メンバー・スタッフの自己紹介

◇次の３つの内容で自己紹介を行う。１月に一番近い人が最初に話し、後は指名して自己紹介する。
1) 私は何をしている人か（職業はなし）
2) 自分のウリ３つ！　持ち味とか特技など
3) どんな想いを持って研究会にかかわろうと思っているか？
・自己紹介内容は割愛。

４．その他事務連絡

◇第２回研究会
・日時：７月２７日（日）午後１時～５時
・場所：ＪＩＣＡ中部国際センター（一社駅）
・内容：情報持ち寄り現状と課題出し→アンケート項目の検討

◇事務連絡
・連絡方法としてメーリングリストを設置することの了承を得る。
・振り込み依頼状の記入・捺印のお願い。

◇次回までの宿題
・現場からどんな情報を聞き出したらよいか、何か聞きたいかを持ってきてほしい。
・各自がもっている現場の情報を持ち寄る

以上

■ 第２回　愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会　議事録

◆日時：平成１５年７月２７日（土）午後１時２５分～５時３０分

◆場所：国際協力事業団中部国際センター講義室１

◆参加者：（委員）今津、荻原、久世、栗木、瀬尾、田中、山中　（欠席者：野田、里村、濱田）　＜敬称略＞
（事務局）礒貝、川合

◆配布資料：

(1)第１回委員会議事録

(2)里村さん、藤原さん、栗木さんの国際理解教育・開発教育の課題等の整理

(3)平成14年度国際理解教育に関する会員校活動報告、国際協（愛知県高等学校国際教育研究協議会）

(4)「開発教育ってなあに？」開発教育協議会（冊子）

(5)教育課程審議会答申（平成10年7月29日）における「総合的な学習の時間」

◆議事の経過と結果の概要

１．本日のねらいと第１回ふりかえり

・座長から本日のねらいを説明し、委員で確認した（議事次第記述の「ねらい」参照）。

・礒貝氏から資料の確認を行った。

・第１回のふりかえりを、議事録をみながら行った。

２．国際理解教育・開発教育の定義の確認

・「開発教育ってなあに？」を紹介し、前回の配布資料を基に、座長から定義を説明し、委員で確認した。

・座長曰く、「開発教育も国際理解教育も、知り、考え、行動する主体を育む教育」、「取り扱う範囲として人権、環境、平和、異文化理解などグローバルイシューと言われている地域や世界の包括な課題を解決していくために自分たちの暮らす社会や地球に手を入れていく、そういう力を養う教育」である。

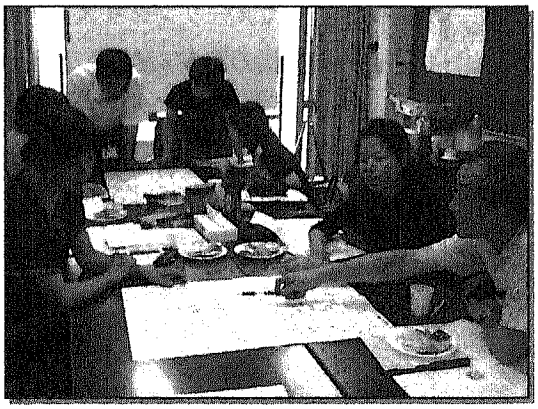
・これまでの学校教育現場では、異文化理解、国際交流、英語教育の部分が多いが、この定義まで踏み込んで力を育んでいくことまでねらいとしているということを、確認した。

３．地域で、学校現場で、国際理解教育・開発教育が推進されることのメリットと意義

・ニーズ調査をするのは、国際理解教育・開発教育が推進されていくことにつなげていくためであり、であるならばその意義を共有しておく必要があると考える。

・どんなメリットや意義があるのか、目に見える形で確認しあいたい。

・２つのグループに分かれて、ポスター裏紙を前に、ブレーンストーミングで出し合い、内容を共有した。

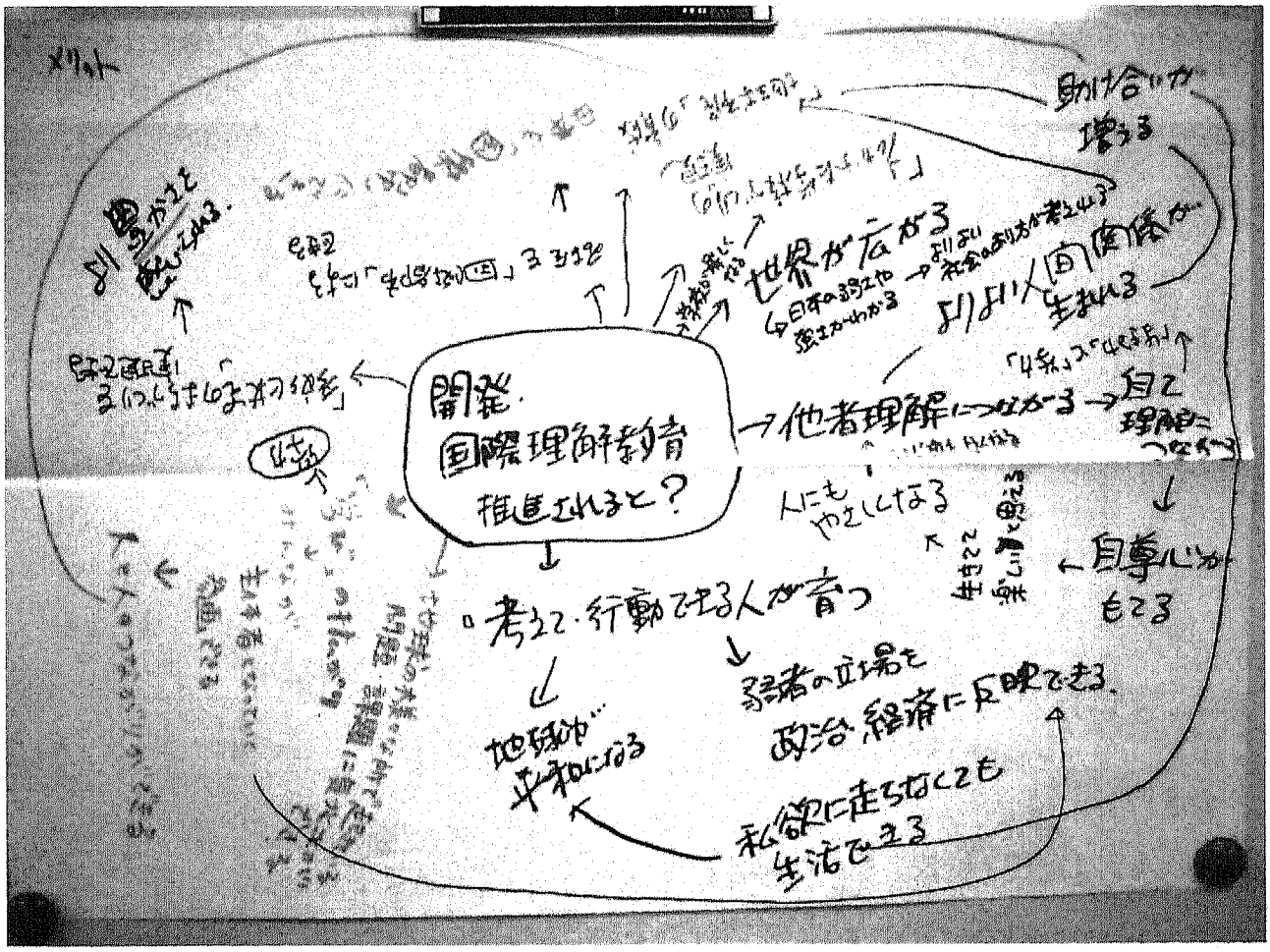


▲ グループワークの様子

＜成果＞「地域で、学校現場で、国際理解教育・開発教育が推進されることのメリットと意義」

◆ グループ１

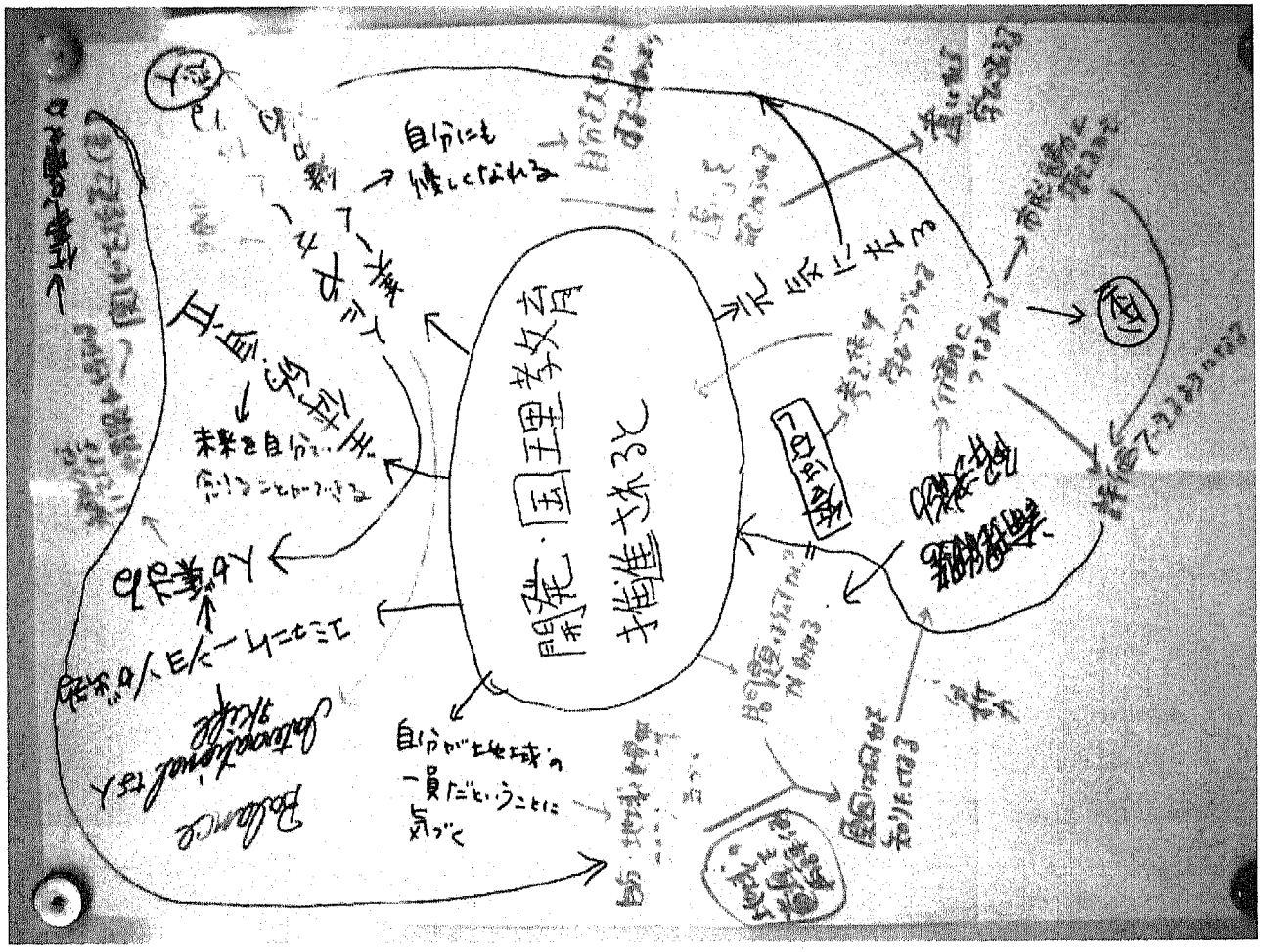
- 「多文化共生」のまちづくりを実現できる
- より豊かさを感じられる
- （質問）豊かさとは？：包括的なもの。心の豊かさだけなく、お金も含めた豊かさ
- 「学び」の広がり
- みんなが主体者となっていく参画できる
- 人とひとのつながりができる
- 地球の様々な所で起きている問題・課題に気づくことができる
- 考えて、行動できる人が育つ
- 地球が平和になる
- 弱者の立場を政治経済に反映できる
- 私欲に走らなくても生活できる
- 他者理解につながる
- 自己理解につながる
- 自尊心がもてる
- 生きていて楽しいと思える
- 人にもやさしくなる
- 「生きる力」と本当の「学力」が育まれる
- よりよい人間関係が生まれる
- 助け合いが増える
- 「地球市民」の育成
- 学校が楽しくなる
- 「開かれた学校づくり」の実現
- 名古屋を、日本を「国際都市」にすることができる



＜成果＞「地域で、学校現場で、国際理解教育・開発教育が推進されることのメリットと意義」

◆ グループ２

・主体的・自立
・未来を自分で創ることができる
・人にやさしくなる
・共感的になる
・美しく魅力的（恋人）
・自分にも優しくなれる
・自分を大切にすることができる
・「違い」を認められる
・違いから学びあえる
・元気になる
・コミュニケーションができる
・人が集まる
・多角的な色々な情報が得られる
・関心を提起
・仕事が増える
・バランス・インターナショナルな人、スキル
・自分が地域の一員だということに気づく
・自分・地域と世界がつながっていることに気づく
・地域の資源を再評価
・問題は何か？がわかる
・原因は何かを知りたくなる（分析力）
・論理的思考、解決能力
・答えはないので考え続け学びつづける
・行動につながる
・評価できるようになる
・市民活動が増えるかも
・金
・（質問）金とは？
→お金が一番リアル。仕事起こし、多様な仕事の形態、小さなＮＰＯが潤う、生きていける



4．デメリットも出そう！

・学校で同教育が推進されることのデメリットも出す必要があるという委員の意見があり、同様に検討した。

＜成果＞「地域で、学校現場で、国際理解教育・開発教育が推進することのデメリット」

◆ グループ1

- 当たり外れがありリスキー
- 成果がわかりにくい
- その後の展開が見えない
- 身近な問題としてとらえていない（創造力）
- マニュアルがない
- 予算がない
- 受験には即役立たないと思われている
- 保護者からの反発
- アウトソーシング（方法が不明）
- 教員のプライド
- 良く知らない事を始めるのはエネルギーがいる
- まわりに理解してもらうのは大変
- 前例がない
- まだマイナーな分野
- 時間もかかる
- 学校・教育委員会が閉鎖的
- 管理には不向きな方法
- 地域のリソースの使い方がわからない
- 教育システムが社会の変化に社会のニーズにあっていない
- 総合学習に対するネガティブな思い
- 多様なゆえに合意形成できない
- 自分で問題解決や質問に答えることができない
- 生徒がのってこない
- 体験したことがない
- 自分の授業がつまらない
- 自己が問われる
- マネジメントの仕方を知らない
- 根本的にねらいが理解されていない

◆ グループ2

- 授業のプログラム（年間計画）の変更がききにくい
- 学校の現在における「教育」と矛盾を抱える
- 受験にデメリット
- 評価しにくいので困ると思う
- 親のニーズに合わない（評価がほしい）
- 誰がどのように？（スペシャリストがいない、学科としてない）
- 国際理解教育・開発教育のコンセンサスがない
- 誤った認識が育つ可能性あり
- みんなが自分の意見を言い出したら困る企業もある
- 教科ナワバリを超えにくい、合科は難しい
- 手間がかかりさらに多忙化する
- 日本人の子どものことで精一杯（国内）
- 知識・技術・カリキュラムを持っていない
- トレーニングを受けていない
- 時間がかかる

◆ その他意見交換

- 成功事例を教えてもらう、モデル見せてもらうと、とっつきやすい
- 総合学習だけでなく、どの教科でもできるんだよ！というように入っていった方が受け入れられやすい。
- 資料：教育課程審議会答申を配って、内容確認。
- 学習指導要領の示す授業時間数の規定と実際の現場のギャップを知りたい。
- 結構ごまかしている。ごまかしている所へＪＩＣＡ国際協力出前講座などに行くから求められるものとミスマッ チが生まれる。

5．ジグソーパズル情報交換タイム（小・中・高・他×効果・課題のマトリクス）

・国際理解教育・開発教育と教育現場について、小学校、中学校、高等学校、その他のそれぞれで、効果がでているものと課題となっているものを分けて、ポストイットに書き出した。

→別紙１ 参照

・上記成果を踏まえて、ポストイットで書き出した情報から、わかったことは何か？を各グループでまとめた。

＜成果＞「国際理解教育・開発教育の効果と課題を出し合ってわかったこと」

◆ グループ１

・学校や個人のレベルが３段階あることを考慮してアンケートを採るべき。
・具体的、積極的に取り組んでいる／取り組み始めた／消極的で取り組んでいないに等しい
・ニーズは高まる傾向にある。重要！→全体としてはまだ低い。
・「国際理解教育」の言葉の認知度は低い。認識が違う。アバウトな認識。
・生徒は柔軟に対応できる。先生は？教育委員会は？
・時間の問題→ワークするのに足りない、先生との打合せが足りない。打合せの仕方も。
・提供する側の問題点→対象が様々でマンパワーが足りない。

◆ グループ２

・格差によって細かい対応が必要
→多様なメニュー、モデル、方法論があるといい。
・ニーズにあわせた情報発信が必要。
・提供できるサービスを明確にする。
・各学校にリソースパーソンを複数つくっていくことが大切
・長期的に取り組んでいる学校は成果を生んでいる
・学校現場のシステムを知る必要がある。
・メリットを理解してもらうことが大切、メリットがわかるような事例を広める。
・教育委員会の研修に参入していくことが必要。
・子ども自身は能力を持っているが機会がない。
→大人にこそ国際理解教育・開発教育が必要。先生も親も一緒に学んで欲しい。
・教員が感じている負担感は想像以上。
・地域のリソースと学校のつながりがない。
・事例発表会を広く行ってプロセスから伝えていけるといい。

6．ニーズ調査をするねらいと対象は何か？

・学校にアンケートを送って、誰に答えてもらう？校長先生？、任意の先生？学校に何通のアンケートを送る？保護者へ？子どもたちへは？
・すべてにアンケートを取ることは難しい。何をねらいに、誰を対象に行うかの優先順位を決めたい。
・前提条件は、愛知県内、小・中・高等・養護学校1,700校弱として考えている。
・２つのグループで、対象をそれぞれ想定し、メリット・デメリットを検討した。
・その結果と現時点の方向性を以下に示した。

＜方向性＞「ニーズ調査の対象」

・以上の結果から現時点での一定の方向性は次のとおりとなりましたが、本日欠席の委員の意見も含めて、予算上の調整も含めて、メーリングリストで検討していくことになりました。

(1) 県内小・中・高校・養護学校等全校には校長名で郵送し、当該担当者に答えてもらう。
(2) それとは別に、ＪＩＣＡで把握している国際理解教育・開発教育に関係する約400人の教員には別途送付し答えてもらう（方法はＥメール、郵送を併用か）。
(3) さらに、県内で１０校ぐらいを抽出しその学校の全教員に答えてもらう。

＜成果＞「ニーズ調査の対象とメリット・デメリット」

◆ グループ1

① 学校として答えてもらう…校長・教頭・教務主任

＜メリット＞	＜デメリット＞
・県下すべての学校に答えてもらえる ・報告書に説得力がある	・作り話的になってしまう ・先生間の温度差がつかめない ・実態がわからない ・答える側も答えにくい

② 個人の立場で答えてもらう…地域で学校を抽出して全員に答えてもらう

＜メリット＞	＜デメリット＞
・世代間、性別などいろいろな視点で分析できる	・「国際理解教育」についての認識の違いがあるので無意識に実施している場合もある →アンケートに反映されない ・地域の偏りをどうするか？ ・抽出の方法が難しい

◆ グループ2

③ 校長を通じて、国際理解教育・開発教育に携わっている人、興味があると思う人、総合学習などやらなきゃいけない立場の人に聞く

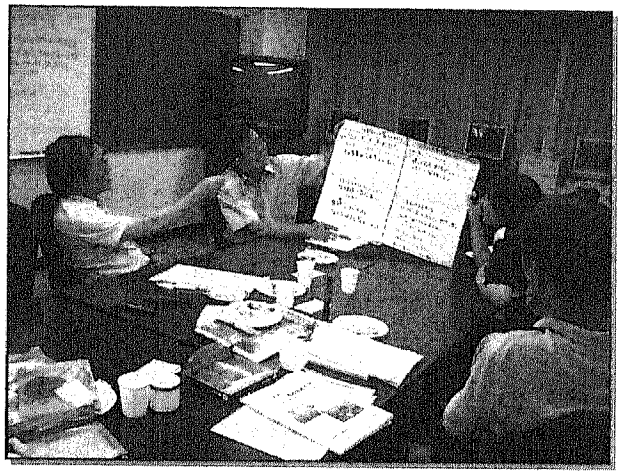
<メリット>	<デメリット>
・やっている学校→実態がわかる ・やっていない学校→国際理解教育への関心が高まる	・校長で潰されるかもしれない

<その他>

・国際理解教育・開発教育については、環境、福祉、異文化理解、人権、平和、ボランティアなどに取り組んでいる総合学習などの担当者と補足を加える

④ 校長に聞く

<メリット>	<デメリット>
・校長の認識を高めることにつながる可能性あり	・実態は？わからない



▲ 発表の様子

◆ その他

・国際協もアンケートを実施する予定としているため、アンケートに協力させてもらえるような話もある。
・教育委員会の交換ボックスはアンケートでは使えない。一太郎形式のデータで渡せば、メールを使って各学校に流すことはできるとのこと。

7．ねらいを達成するために　必要・有効な質問は？（ねらいごとのＫＪ法）

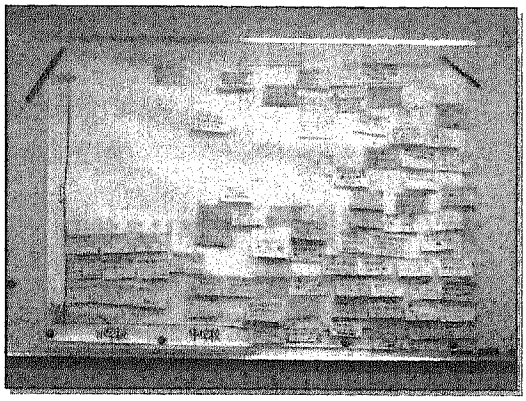
→時間切れでＭＬや次回に検討とした。

以 上

別紙１

■ 国際理解教育・開発教育の効果と課題の状況

第2回愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会に参加した委員が現在感じている国際理解教育・開発教育の効果や課題について、カードに書き出し、小学校、中学校、高等学校、その他（その他の学校や全体を通して）ごとに整理したものを以下にまとめました。



★『効果』と感じる状況

◆ 小学校

- 国際理解教育に長期ビジョンを持って取り組み、クラスの変化を実感している先生の事例を知っている

◆ 中学校

- 継続的に関わっていく場合、ワークショップ経験を先生が重ねることによりステップアップしていける（先生がファシリテーターをできるようになる）ことが多い
- ＪＩＣＡ、ＡＩＡ、名古屋ＮＧＯセンター、ＮＩＥＤと関わりのある先生のいる学校は、それなりに取り組まれていることが多い
- 国際をテーマにしたエッセイコンテストは、愛知県が全国で一番

◆ 高等学校

- 青少年のプレゼンテーション、ワークショップ参加能力は高い（機会がどれだけ与えられているか次第）
- 生徒は考えがやわらかい（互いからよく学ぶ）
- 国際理解教育等を進めると「社会に目を向け始める」生徒も結構いる
- ワークショップのニーズを感じることが多い
- 私立の高校で２時間枠が多いし、比較的ノリがよく、やりやすかった
- ワークショップを取り入れた学校だと展開がスムーズ
- 生徒がワークショップをする授業がすごく面白かった！
- クラスができている「コミュニティとして成り立っている」学校は国際理解教育がやりやすい

◆ その他・全体を通じてなど

- いかに「メリット」があるかとか、外部リソースの使い方を知っている先生のいる学校は推進されていく
- 総合学習（国際理解）に対し、ねらい、カリキュラムを作成し、成果を当該校の特色にしている学校が出てきた
- 学校内に総合学習を契機に「横断的チームワーク」が生まれている学校がある
- ボランティアセンターに依頼が増えている…「ボランティア」というテーマが増えたから？
- ＪＩＣＡ国際協力出前講座の依頼が昨年の１.７倍となっている
- 同出前講座の依頼の対象・テーマ（食、音楽、衣装、ダンス等）が多様化してきている
- ＰＴＡを通して依頼がくることもある
- 「進路」をテーマに何度か同出前講座を依頼された

- イベントに来るのはほとんどが女性（４０人中３６人とか）
- お爺さん、お婆さんが元気（シニアボランティア、高年大学等）
- 今日の日経の記事では60、70代は「一番やりたいこと」に「社会貢献（ボランティア）」を挙げている
- 動機付け、学生（大学）の企業化に結がっている

★『課題』と感じる状況

◆ 小学校

- だいたい国際理解教育ってやらなくちゃいけないものでも何でもない！とみんな思っている
- 開発教育という言葉はみんな知らない
- 国際理解をすごく狭い意味で捉えている
- 「英語」＝「国際理解教育」という考え方がある→英語のニーズは強いようだ
- お金がかかるし、予算を取るのが大変
- 同好会の親分は「やることが手詰まりなんだよね～」とぼやいていた（どこかの校長）
- 「心のノート」というものがあって、結構これがワークショップの世界→そんなにみんな使ってないけど？
- どこかにお勉強に行こう！という人はとっても少ない
- 横のつながりを維持するのが難しい
- 外部の人と横のつながりをつくった時に、外部の人とのコミュニケーションが、先生の移動の中で繋がりが続きにくい

◆ 中学校

- 学校によって様々なのでどんな総合学習をしてほしいのか、生徒のワークショップレベルがわからず難しい
- 先生が総合学習を丸投げしている場合は生徒のモチベーションが低い
- 国際理解教育に熱心な教育がいるが、現場の中でうずもれてしまっている
- 先生の時間が少ないので打合せがじっくりできない
- 加配教員のいる学校とそうでない学校との違いは大きい（国際学級、日本語教室）
- 海外日本人学校、青年海外協力隊で教えていた教員人材が国内で生かされていない
- 依頼内容で、「職業訓練」の要素を入れて欲しいという依頼が増えている
- ＮＧＯなのに、異文化理解の一環として、「キリスト教」について訪問する生徒が多い
- これまでの学校教育と総合学習の「教育」の矛盾が生じる

◆ 高等学校

- 国際理解教育に興味のある先生が少ない［小・中も］
- ＪＩＣＡ国際協力出前講座の仕様が不明（イベント、丸投げ）
- 英語＝国際理解という考え方はかなりある［小・中も］
- 総合学習はしっかりやろうと思うと準備・その他が大変［中も］
- 時間がない、余裕がない（色々な意味で）［中も］

- 総合学習の時間を教科学習などに充ててしまっている学校もある
- 地域のリソース（ＪＩＣＡのサービス等）が知られていない
- 予算を取るのは年度初めなので融通が利かない
- 国際理解に興味のある生徒、親も少ない感じがする［小・中も］
- 先生だけでなく親もあんまり社会に目を向けない、目を向ける必要を感じていない感じを持つ
- 依頼の学校間、先生間の格差が広がっている（よいことかも）

◆ その他、全体を通じてなど

＜提供側の課題＞

- ファシリテーターをしたい人が増えている…誰でもいいの？
- ＮＧＯ等のマンパワーが足りない
- 自分たちを含めて横のつながりが弱い（提供側）
- 市民ボランティアを学校に取り込むシステムづくりがあと一歩

＜提供する時の課題＞

- 「教育委員会」、「校長先生」を通したかよく聞かれる。
- 「ＪＩＣＡ」とか「国際協力事業団」と電話すると怪しまれる
- 開発教育の名前を使うのを苦労している

＜依頼側の課題＞

- 国際理解教育を依頼されるとき、先生側にあまり明確なねらいがないことが多かった
- 依頼を受ける時に先生、学校での以前よりも温度差を感じている
- 勉強会などに出ている先生って全体の何％くらい？
- 総合学習の理解について、小→中→高、管理職と一般教員の落差が大きい感じを持つ
- 多文化共生まちづくりの取組に教育委員会が理解してくれないケースがある
- 国際理解教育や開発教育に取り組むと忙しくなる…と思われている→メリットが理解や実感がなされていない
- 行政全般の人事異動が継続性でネックになっている
- ボラセンの学校調査によると次年度の総合学習について考え始めるのは２月頃とか

＜依頼側と提供側のマッチングの課題＞

- 学校のニーズを私達が提供したいねらいのすり合わせに時間がかかる
- 単発の１時限での依頼では、流れのあるプログラムができない
- 時間内での成果の成立が重視されている
- 文部省の現職派遣の青年海外協力隊のＯＢ・ＯＧの教員は増えているが、現場で活動できていないとよく聞く

＜全体的な課題＞

- セルフエスティームを育んだり課題解決能力を強力やコミュニケーションを通して育んだり、自分ー地域ー地球のつながりを感じる事が優先とはされていない
- 高→中→小といくにつれ、こどもが徐々に元気がなくなっている
- 総合学習（開発教育）の評価尺度が求められている

以 上

■ 第３回　愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会　議事録

◆日時：平成１５年８月２８日（木）午後６時３０分～８時３０分

◆場所：ＮＩＥＤ・国際理解教育センター事務所オープンスペース

◆参加者：（委員）今津、荻原、久世、栗木、里村、村山（瀬尾の代理）、田中、野田、濱田、山中　＜敬称略＞

（事務局）礒貝、藤原、川合

（オブザーバー）(財)名古屋国際センター：林、加賀谷

(特)名古屋ＮＧＯセンター：古川、山本

(財)愛知県国際交流協会：加藤

ＪＩＣＡ中部国際センター：平野、伊藤、佐々木

◆配布資料：

(0)レジュメ（議事次第）

(1)第２回研究会議事録

(2)開発教育ニーズ調査アンケート調査事例

◆議事の経過と結果の概要

１．これまでのふりかえりと本日のねらいの確認

◇オブザーバーたくさんいるので、出席者の自己紹介を行う。

◇座長から、研究会の目的、第１回、第２回の開催内容について説明した。

◇本日のねらいとこれまでの到達点として次のことを説明、確認した。

・国際理解教育・開発教育の定義

→第２回議事録ｐ１の項目２を参照。

・国際理解教育・開発教育が地域や教育現場で推進される事の意義（メリット／デメリット）

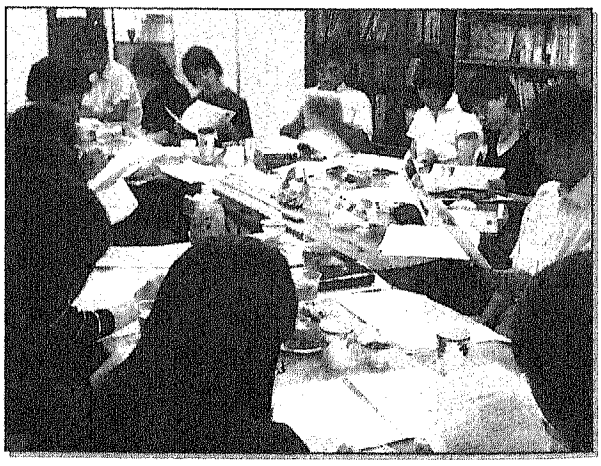
→第２回議事録ｐ１～４の項目３、４を各自７～１０分間で読み返し、確認した。

・学校現場における国際理解教育・開発教育推進の課題

→第２回議事録ｐ８～９のように整理したことを説明した。

・アンケートのねらい、アンケート送付先確認

→第２回議事録ｐ６の項目６について、確認事項として説明した。



▲ 第３回研究会の様子

2．アンケートの目的確認

◇全く無関心の人へ情報提供、ちょっと知っている人の現状、本当に取り組んでいる人からのニーズや情報提供の３つの視点でアンケートを行う旨、座長から説明し、質疑応答を行った。

・既存事例を生かして、検討すべき。資料(3)の利用方法は？

→全国に１９９９年実施した調査だが総合学習が正式に始まる前に調査されたものという違いはある。

・アンケートのねらいは？

→第１回の趣旨に書いてある当初のねらいを確認した。

・当該担当者へとは、国際理解教育・開発教育担当者でよいか？

→そのとおり。

・無関心の教員に対する情報提供のねらいは、１０校選抜の所で確保するのか？

→全校に出しても取り組んでいない学校もあるので、そうした場合のことである。

3．ねらいを達成するために必要・有効な質問は？

・第２回の議事録とアンケート事例を読み解いてアンケート項目を考えた。

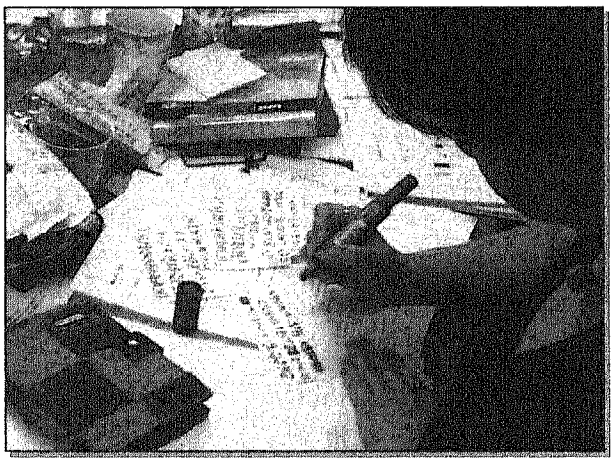
・次のような視点を持って、カードにアンケート項目をそれぞれ書き出した。

1) 現状としてどのようなことを数値的に明らかにしたいか？聞きたいか？

2) 提供者の立場として、どのようなニーズを把握したいのか？

・５つのグループに分かれて模造紙で質問項目を分類整理した。

・その後、全体で分類整理したカードの見だしを発表しあって、全体で共有した。→別紙１ 参照



▲ カードに書き出す様子

▲ 発表・全体共有の様子

5．その他事務連絡

・予定していた次回研究会までに間にもう一回研究会を実施して、アンケートの内容を検討する旨説明し、了承を得る。

・日程調整の結果、９月１６日（火）午後６時３０分～、ＮＩＥＤ・国際理解教育センター事務所となった。

以 上

別紙１

■ アンケート設問の個別カードのまとめ

学校の「国際性」に関する事ついて

・外国籍児童・生徒数
・長期海外経験児童・生徒数
・既存の教科の中で国際性（地球市民性）を高める取り組みをしているか？
・学校と外国人保護者／長期海外経験を有する保護者との関係は？
・次のいずれかはありますか？　国際教室・日本語教室・加配教員

国際理解教育の認知度とそのイメージ

・国際理解教育と開発教育とでは、どちらの名前により馴染みがありますか？
・国際理解教育のイメージは？　国際理解教育に含まれると思う内容（選択肢）
・国際理解教育に関する言葉の認知度（ファシリテーター／ワークショップ／KJ 法等）
・あなたの身近に国際理解教育を行っている人はいますか？

開発教育のイメージ

・「開発教育」と聞いてイメージすることは何ですか？
　→選択肢
　　途上国の開発援助／人間開発・人材育成／日本と世界のつながり／持続可能な環境と発展／途上国の貧困問題
・開発教育とは途上国の低開発と先進国の過剰開発をめぐる問題の理解と解決をめざす教育ですが、あなたは「開発途上国」の問題をどの程度取り上げて教えていますか？
・外国に関する問題を教科書を離れてどれくらい話すか？
・あなたの身近に開発教育を行っている人はいますか？

取り組んでいるか？内容は？

○<u>取り組んでいる人</u>
・国際理解教育として取り組んでいることは何か？
　→どの科目・分野で扱っていますか？
　→どのような内容の事を？
　→選択肢
　　英語／外国人との交流／世界の文化調べ／姉妹提携校との交流・留学／途上国を巡る問題／先進国と途上国の格差／エッセイコンテスト／スタディツアー／その他
　→どのような方法を用いて
　→国際理解教育に取り組む体制は？　個人？委員会（チーム）形式？